図書館活動へのアプローチ

荷葉　堅正

一

司書課程の「図書館活動」というのは、文部省の社会教育局の指示[1]によれば、「利用者に対する館内館外の奉仕活動一般について体系的に説き、図書館奉仕の協力について概観する。一、奉仕活動の特質とその体系　二、奉仕の対象と方法　三、閲覧と貸出　四、地域計画とライブラリーシステム　五、図書館奉仕の協力」といわれ、司書課程の「図書館活動」は図書館が図書館利用者に対して行なわれる奉仕活動から別に一科目を成している「参考業務」の分野を除いたものと考えられている。しかし、その直接の奉仕活動の中に含まれていない収集、目録、分類についても、広い意味では利用者に対する奉仕活動であり、間接的ではあるが最も基本的な奉仕活動であると考えなければならない。

それだから普通には言葉の示すままに、それは図書館の活動の全般を指すと考えることから問題にすべきである。ここで、図書館の活動の全般とは、図書館そのものを対象としているのであるが、たんに、対象としての図書館を指すだけではなく、機能的に見て図書館現象を対象としてその活動を考察しなければならない。すなわち図書館現象の必然性を、その文化的社会的基盤から認識し、その活動の正当さを考察する必要性がある。

いきおい図書館奉仕とは何かを問う場合の答えは、基本的には図書館とは何かを問う答にならざるを得ない。そこに図書館の奉仕活動への方向づけが与えられるのである。

アーウイン（Arwin, Raymond）の論説を要約して、椎名六郎氏[2]は、

philosophy of librarianship の philosophy は知識の部門の法則または原理の研究よりほかに意味をもっていない。それゆえにこの語はまた次のような意味を包含しなければならない。

(1) librarianship の定義

(2) その目的や目標、範囲についての説明

(3) 知識の他の部門との関係、すなわち他の主題との関係の説明

しかしこれだけでは、図書館現象の他の部門――図書館で用いられる技術や奉仕の諸相、いわゆる実践部門の説明ができない。そこで、図書館現象は理論（theory または theoretic）と実践（practice または practical）の二面があるとし、理論は人間活動（human activity）の論理的（logical）と合理的（rational）な面であって、実践は人間の意志の運用（operate）の面であるとした。人間生活の、この二つの面は、振り子の二つの振動のように、相互依存している。一つの面は他のものがなくては考えられない。……図書館現象もこの理論と実践の二つの面から考察しなければならない。この理論と実践とを包含したものを図書館学（librarianship）という。

と述べている。この要約は、なお吟味しなければならない点があるけれども、ひとまず、後との連関のために、その理論と実践の理解を採用したい。ただ実践（practice または practical）の訳語は実際と訂正して使用することにしたい。なお図書館学（Librarianship）については、Library science との関係は多く論ぜられて来た。それにもかかわらず我々は、常識的に、アメリカでは Library science を使用し、英国では Librarianship を使用しているということに無条件に従い、一方バトラーの論稿に見るそれら二つの言葉の使い方だけで、Library science を図書館学 Librarianship を〝司書職〟もしくは〝司書の職能〟として見る傾向がある。しかしそれらの適用は正しい理解を害することさえある。そのため次に Librarianship と Library science の関係を簡単に考えたい。

二

Librarianship という語は、Library Science（図書館学）と同じ意味である。図書館学（Library Science）は記録された情報の収集、保存、組織、利用とに関連する。

デントン（J. P. Danton）[3]は Librarianship を「記録した資料、印刷した資料の認識、収集、組織立て、保存と利用に関連している。」と、定義している。

また、メイアー（H. W. B. Meyers）[4]は次の如く定義している。「Librariaship は記録された人間の知識の生産、配慮（care）と利用を取扱うところの人間の知識の分科である。」

また、ホイーラー（J. L. Wheeler）[5]によれば、「Librarianship は第一に書物と他の原文のままの資料と関連する。即ちそれらの発見と選択と調整に関連し、常に次第に重要さを増して、それらの充分なる利用に関連し、研学のための読書を求め、情報を求め、娯楽を求め、自己開発の読書を求める、即ち図書館を利用する人々と関連する」と定義されている。

一般に Librarianship はカルキュラムの中での図書館学と承認され、一方には専門職としての司書職（もしくは図書館員の職能）として認められて来た。

しかし公共図書館はその目的として、一つには情報と知識を得るためのツール（tool）であることを確定しており、また一つには社会奉仕のためと規定され、住民の福祉にとって望ましいと考えるところを行うことが委任されている。この社会奉仕を専門的に進めようとするならば地域社会の調査がなされなければならない。そこに社会の図書館に対する複雑な要求を見つけ出さなければならない。

図書館はこのような確定した目的をもっているのであるから、それを対象とする Librarianship は単なる技能・技術ではないといわなければならない。

また Librarianship がもしあらゆる図書館資料の知識を地域社会の人や図書館員に要求したとき、それら多くの、しかも種類を異にした資料を知ろうとするには、高度の書誌を見る洞察力、即ち書誌という図式の中に簡単な内容を読みとることを導入しなければならない。そうしたことは他の学問に於いても同じである。それだから、Librarianship は図書館学として、他の学問と同じく一つの学問（scholarship）である。

また記録された新しい専門の資料を選択し整理をするとき、広い人文主義上の確定した知識の基礎を予想して行なわれ、そして新しい研究を収集し、最近発見したものを収集することは、それと同じく意図的に資料を分類し、綜合し、更にそれら資料の意義を示し、解釈することは、実際に長い間経験した技術的な実際的知識に精通することを抜きにしては不可能であり、ドキュメントの資料を選択し整理するには理論的原理と実際の技術的知識との両方が必ず

必要であるといわれている。

それだから図書館学（Librarianship=Library science）は他の学問と同じく、理論的原理と技術的な実際的知識との何れをも包含し、地域社会の要求に答え、それに奉仕するため、適当にそれを包含している。しかも常に発展している図書館学の概念は、定義の主要部を目的や他の主題との関係を明白にすることにより理論的に規定し、我々の時代において最も重要な社会的機関の一つである図書館の組織・管理を実際的な知識によって支持するのである。因にバトラーは「図書館学（Librarianship）の知的内容は、明らかに三つの相異った部門から成り立っている。即ち、その第一は、科学的に操作されなければならない事物と原理であり、第二のものは、その操作に専門の理解と技術を要する過程と器械（apparatus）であり、第三のものは、humanisticにのみ理解され得る文化的動機である」と『専門職としての司書職（Librarianship as a profession）』（二四七頁）にのべている。

三

図書館学に於いて理論的研究と実際面の考察の何れを先にすべきかという問題は、今世紀の始めから提起されてきた。

学校を設けて図書館員養成を行うアメリカでは、特に重要な問題となってきた。しかし、ヨーロッパでは図書館員養成の基本は、館内研修により、経験的な技術に中心が置かれている。その限りに於いては、理論と実際の何れを先にするかの問題は起きていないし、学校を設けて図書館員養成を強力に行っているアメリカに比べて、この問題はそれ程重要視されていないと考えられる。

図書館員にとって最も重要視されていることは、たとえ如何なる事態に遭遇しても、最善の方法を選び、最も堅実な解決ができ、より善く地域社会に奉仕することである。図書館奉仕を、能率的にまた正しく行うための訓練が、過去に於いて重要であったように、今なお重要であることは誰も否定することはできない。しかし、より善く地域社会に奉仕するためには、特定の状態についての処理の仕方を技術的に知っているのみならず、それ以上に理論と原則を知っていることが望ましい。

最も技術的と考えられる目録法に関してさえも、「図書館員は単に技術家である許りでなく、彼等の技術に対して考える人であり、批評家でなければならない。[6]」という主張と、「理論は上級コースまで保留しておいて、まっさき

に実際的であるべきである。」[7] という主張が相対して存在してしいる。

こうした考え方が、アメリカでは互い違いに提起されてきたが、それら世論の変遷の中に次第に実際よりも理論の優先が受入れられるようになってきた。そこに至ったことに最も貢献した人に、バトラー(Butler, Pierce)、ウイリアムソン[8] (Williamson, Chaves C.)、アメリカ以外の国では、インドのランガナータン (Ranganathan, S, R.)、イギリスのアーウイン (Arwin, Raymond) 等々がある。

バトラーについては、『図書館学序説』[9]に於いて理論を優先していることは既述[10]のようである。

ウイリアムソンは所謂「ウィリアムソン報告」において、彼は「極端な技術」から図書館学を解放しようとしたものであり、図書館学校の教育で最も重要なことは、進歩的な図書館活動についての正しい理解であり、その理解が可能な形において教育内容は構成されねばならないとしている。

ランガナータンについては、彼が一九三一年に出版した「図書館学の五原則」(The five laws of Library science) の表題によっても理解されうる。彼の学説は要約すれば、

第一法則　〃本は利用するためのものである〃 (Books are for use)

第二法則　〃すべての人のために本は存在する〃 (Books are for all) (Every reader his book)[11]

第三法則　〃すべての本を読者に〃　(Every book, its reader)

第四法則　〃読者の時間を節約せよ〃　(Save the time of readers)

第五法則　〃図書館は成長する有機体である〃 (A library is a growing organization)

となる。

これら五法則の中に、図書館活動の全てが包含せられ、明白に図書館の機能を示している。或る学者はこれを支持して、この五法則の外に、これ以上の規範的原理はないと公言している。ウンガナータンは、この書の第二版において、彼の学説の科学性を論証しようとする一章が付記されている。

ランガナータンについて、その詳細は別の機会に譲り、奉仕活動を考察する筋道に進まなければならない。

図書館は常に顕在的利用者と潜在的利用者を含む地域社会に対しての奉仕を公言しているが、その社会に対して、図書館の実際の活動が最大限の利益を与える助けとなるかという疑問に対する答えができるのは、図書館学 (Librarian-

ship：図書館の職能）が哲学をもち、規範的原理、すなわち方針と図書館の活動を正当化する目的を持つ時だけである。

そのことはバトラーが、その著『図書館学序説』の第五章に次の如く説くことによっても知られる。

職業哲学（Professional philosophy）があるならば、図書館学（librarianship）は、目的を完全に意識することからのみ生ずる、行為の方向づけがあたえられるだろう。

この引用文[12]が含まれる『図書館学序説』第五章の詳細を見る必要があるので、次項に於いてそれに関する考察をしたい。

四

バトラーの「図書館学序説」の第五章「実際面の考察practical consideration」は、表題の指示によると、理論に対して、図書館の実際の活動が述べられるように思われる。しかしながら説相の特異なためかすなおに理解されにくい。

椎名六郎氏は、その著『新図書館学概論[13]』において、この第五章を要約して、

「このような意味と、機能と性格をもっている図書館を伝うるため、固有な技術が要請されるのである。その固有の技術、処理方法を利用する、これが書誌学という特殊な方法である。しかし図書館職員は、単にこの書誌作成だけで、満足してはならない。図書を書誌学的に記録することは、それは単なる在庫目録にしかすぎない。図書館職員はこれらの要約された記入に、いかなる意味があるかについては、明白な歴史的意味を持たぬかぎり、必ず地域社会に、よい結果をもたらさないであろう」という。

この要約を第五章本文と校勘してみても、全体の要約として、理解しにくい。むしろ、藤野幸雄氏が本書を邦訳するに際して、序に於いて[14]言われている以下のことが、より善く理解される。

「実際面の考察」に述べられているのは、図書館学が構築された場合、現実の図書館がどのような利益を受けるかの考察である。ここでは図書館員、図書館経営の実状が指摘されている。

ここに示される図書館員、図書館経営を図書館員、図書館活動に置き代えて理解されるべきであり、また単なる実状の指摘というより、実状が分析され、実際面の考察がなされているものとして、理解されるべきだろう。

それは、本論の序[15]においてバトラー自身が、「社会学・

心理学・歴史という三つのカテゴリーのもとに、図書館活動の領域に見られるずっと顕著な現象をまず調査することを試みた。ここに含まれる事柄のより正確な知識があれば、それぞれの現象は科学的研究に価するかも知れないという推論が、それと明言していない場合でも、だいたい暗示はされている。」と述べていることからみても、より容易に考察されうる。

前項目の最後に引用した文章につづいて、バトラーは「この公共機関が必要かつ正当な社会的要素と見なされるか、あるいは幸運な個人に功徳をほどこす慈善行為と見なろう。」[16]といされるかは、地域社会の福祉向上にとって大きな違いとなうこれは公共機関としての図書館が、社会において必要欠くことの出来ないものであり、その奉仕活動が義務とせられるによって、あった方が善い図書館、或いは慈善行為としての奉仕活動のしなくても済むものとでは、地域社会の福祉向上に全く違ったものとなるというのである。

新しい図書館は、社会にあって、なくてはならないものであるが、現実にはただあった方が善いとなすものがあり、奉仕活動も単なる慈善行為と考えられている実際があり、それが疑問視され、社会学の領域のもとで、図書館が正当な社会的要素であるとするのである。

このことは現実の図書館活動に見られる最も顕著な現象である。

次に心理学の領域については、心理学の正確な知識が実際的価値につながるか必ずしもはっきりせず、各個人の読書の好み、動機、方法、結果として得るものは各人に特有なものである。それだから「図書館員の務めは、たとえ必要だとしても、人々をその意にさからってまで誘いこんだり、自分の思考方式に変えさせることではない。図書館員は社会における文化遺産の世話人にすぎない。彼が職場において司る責任とは、能力の及ぶ限りこの遺産を地域社会の利益に供することであろう。」[17]といい、現実には自分の経験にてらして、如何なる場合にも、十分に指導し得ると考える図書館員があり、奉仕活動にあたっても、地域社会の要求に耳を傾けず、個人の動機、知的能力に対して同情をこめた理解がないという顕著な現象をとり上げ、それを心理学に照らして、心理学の正確な知識が、常に実際的価値につながるものではないことを知り、読者個人に対する図書館の奉仕活動の主要な点は、読者の動機・目的を助けるようにし、知的能力に対しては同情をこめた理解がなければならないというのである。

歴史学との関連は次に掲げる本文によって知られる。

（前に引用した椎名六郎氏の第五章の要約を示す解釈は、この文に相応している。）

「図書館員は職業能力として、本を直接知ることより本について学ぼうと努めねばなるまい。基礎となる研究は書誌の歴史である。すでに見てきた通り、それは文学、学術それぞれの歴史、および現在の学問体系の中でのそれらの整合した効用ということから成り立っている。この研究から得るところがあるかどうかは、形式的な書誌の図式というものを歴史の簡略な記述として読みとる技術を身につけているか否かに大きく依存している。[18]」

ここでいう本というのは、情報・文献までも含み、情報については、二次情報までも含み、最も新しい図書館活動を二次資料の作成に求め、しかもそれを形式的な書誌の図式とするだけでなく、そこに簡略な実際的価値を読みとる技術を修得しなければならないとする。ここに示されることが図書館学の動向から考えて、彼の学説の決論のような受け取り方もできようが、先に述べて来たように、これは図書館活動の領域に見られる顕著な現象、まず歴史という点で吟味して、それを理解しようとしたものである。そこには比較的多くの本を読み、それだけで図書館の専門的職能があると考える図書館員があり、奉仕活動にしても、その比較的多くの読書経験を理解させようとするにとどまっているものがあるのではないか。最近のように文献情報の数の増大と質の変化に対応して、それらについて知り学ぼうとすることが必要であり、しかも歴史学の特定の型に問いながら、本・文献・情報を知り、学ぼうとしなければならないというのである。これには書誌が必要であり、しかも簡略な内容をその書誌によりて読みとる必要があるのではないか。しかもこうしたことが、書誌（Bibliography）の中に、指示的なもの（indicative）と報知的なもの（informative）の区別を生み出して来る要因を持つのではないか。バトラーの学説と情報学との接点をそこに見たい。

五

ここに来て具体的な公共図書館の活動に入らなければならないが、その一つとして広報活動がある。これを普通にPRと呼んでいる。それはPublic Relationsの略号である。このことの一般的意味はともかくとして、『全国公共図書館研究集会報告』によれば、「図書館のもつ機能を一般民衆に理解してもらう許りでなく、さらに民衆を支持し、積極的に利用されるように努力する活動である」という。し

かし一方、中国地区の研究集会の結論として、「図書館のPRは、図書館が図書館の本質であるサービス実現のために」公衆の意見や態度を判断して、サービス組織を主体的に改善し、各種の手段を通じて、図書館の性格を、公衆及び図書館の支持者達に広く周知宣伝し、理解と協力を得ようとして実施する計画的かつ継続的活動という。」と示されている。この二つの定義の中、どちらを採用するかといえば、後者を採用せざるを得ない。その理由は、上来長々と述べて来たことである。再びここに指摘すれば、図書館の奉仕活動が図書館の本質的機能であることと、現状分析の必要がその定義の中に含まれているからである。

次にこのPRはどのようにすべきかを問うとき、先ず図書館は如何にあるべきかという問いから始められなければならない。図書館は誰のために存し、図書館の奉仕活動は誰のためにすべきかと問えば、地域社会の大衆と答えなければならない。そうした図書館が過去において経験したように単に〃あった方がましである図書館〃の状態から〃如何しても社会になくてはならない図書館〃に、移行しなければならない。この図書館を必要かつ正当な社会の要素と見ることである。

また図書館のPR活動は、図書館の目的、機能、活動から自然に生じてくるものであるから、それが対象とする地域社会の成員がおかれている諸相とそれらの成員の図書館に対する理解や利用する技能・態度・関心が十分にかつ好意的に考慮されなければならない。すでに図書館を利用したことのある人々の印象を知ると同時に未だ利用したことのない潜在的利用者が図書館を如何見ているかと考慮しなければならない。

また図書館が封建的なものと規定されたものが、近代的な、新しい図書館に展開する課題にとりくまなければならない。それは一回的な変遷としてではなくて、絶えざる展開としてとりくまなければならない。封建的資料保存中心の図書館から利用中心の図書館への展開を意味している。

しかもこうした考察がなされる要因は、地域社会に余り善く知られていない図書館についての現状分析であろう。きわめて大胆に、それを取り上げれば、[19]

(1) 地域社会に対する取り組みの不足
(2) 資料保存意識の過剰
(3) 図書館技術の偏重（整理と保存技術）
(4) 文化的な雰囲気に慣れすぎる事から派生する特権意識の未整理
(5) 実務能力と知識と教養との不足、またそれから来る

意識の低重さ

(6) 奉仕方法の狭さと貧困性

(7) 図書館活動の本質の把握不足

(8) 評価と分析と自己矯正の甘さ

(9) 図書館人の内部にある後進性

こうした現状分析の上に、図書館員の資質の向上をはかり、図書館の内部統制をはかることが、PRの主体でなければならない。

そこに図書館活動が、資料の認識・収集・組織・保管・利用としてなされ、特にその利用を充足するために、より直接的な奉仕活動が必要になるのである。

その中で特に注意しなければならないのは、図書館資料の利用を促進するために、多くの奉仕活動がなされるが、それらは図書館側から見れば、外へ向う活動――エクステンション・ワーク(Extention work)であるけれども、それに参加する地域社会の連帯を求める人々から見れば一つの文化価値を目指すところの求心的な動きであるということである。

そのことが奉仕活動のこれからのあり方を変えて行くのではないかと考えられる。変えて行くというよりは、本来の厳しいあり方に向うこととも言えよう。

註

① 「司書講習の科目の内容」（昭和四三年四月文部省社会教育局

② 椎名六郎　新図書館学概論　一一八頁。

③ Danton J. Perian; Pleas for a Philosophy of Librarianship. Library Quarterly, v. 4(4), 1934, pp. 527–551.

④ Meyer, Hermann. H. B.; Library extension—A Movement for a Problem. Library Journal, vol. 50, No. 4. 1951.

⑤ Wheeler, J. L.; Progress and Problems.

⑥ Lubetsky, s.; On the teaching of cataloguing, Journal of education for librarianship, vol. 5, 1965, p. 235–8.

⑦ Frary, C. J.; Implications of present trends in technical services for library instruction, Journal of education for librarianship. vol. 2, 1962, p. 132–43.

⑧ 小倉親雄、アメリカ図書館思想の研究、二七四～二九七頁。

⑨ An introduction to Library science.

⑩ 拙稿「図書館における人文学的資料の役割」大谷学報、五三巻一号、一三～二四頁。

⑪ 同書第二版に見られるもの。

⑫ 藤野幸雄訳、図書館学序説、一一九～二〇頁。

⑬ 一一四頁。

⑭ 藤野訳、上掲書七頁。

⑮ Butler, Pierce; An introduction to library science. p.

XV-XVI. 藤野訳、同二七頁。

⑯ Butler, Pierce ; 同 p. 103.

⑰ 同、p. 105～106.

⑱ 同、p. 106～107.

⑲ 図書館ハンドブック、改訂版、一九六三年、六六六頁。

（本学教授　図書館学）